様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４２２２

研究課題名（和文）現代ドイツ教育哲学における人間形成論的ライフヒストリー研究の動向と課題

研究課題名（英文）Trends and Issues of the "bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung" in the contemporary German Philosophy of Education

研究代表者
野平　慎二（NOBIRA, SHINJI）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２４３５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、現代ドイツ教育哲学における人間形成論的ライフヒストリー研究（BOB）の動向と課題を、①人間形成の概念規定、②経験と規範との関係、という２つの観点から解明することを目的とした。BOBを主導する「変容としての人間形成過程の理論」（コラー）では、人間形成は、自己・他者・世界との関係の枠組みの変容と捉えられており、規範的でない人間形成概念が提示されていることを確認した。また、近代的な人間形成概念の課題を批判的に克服するBOBのあり方として、ライフヒストリー・インタビューを通して非弁証法的な人間形成の形態を描き出す試みを提示した。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to examine trends and issues of the bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung (BOB) in the contemporary German philosophy of education, especially focusing on the definition of the concept of Bildung (1) and the relation between empirical reality and conceptual normativity (2). In this research, it is found out that the concept of Bildung is defined as any transformation of figure of relation to self, to others and to the world in the Theory of Bildung as the transformative process, one of the representative theories of the trends of BOB, proposed by H. -Chr. Koller. It is also found out that the concept of Bildung in this theory is characterized as not-normative. In this research, it is pointed out that one of the significant tasks of the contemporary BOB, which aims to get over difficulties of the traditional concept of Bildung, is to describe a non-dialectic figure of Bildung based on empirical life history interviews.

研究分野：教育哲学

キーワード：人間形成論　ライフヒストリー研究　ビオグラフィ研究　質的人間形成研究　ドイツ

１．研究開始当初の背景

現代のドイツ教育哲学では、伝統的な人間形成論（Bildungstheorie）と、経験的な人間形成研究（Bildungsforschung）を架橋しようとする試みがひとつの潮流をなしている。インタビューのなかで物語られたライフヒストリー（life history, Biographie）を人間形成の観点から分析する「人間形成論的ライフヒストリー研究 bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung : BOB」はその典型である。

BOB は、目的設定の妥当性を問わないまま経験的なエビデンスを過度に重視する現代の教育動向に歯止めをかける根拠として、意義あるアプローチと見なされている。他方、BOB では多くの場合、人間形成は自己関係や世界関係の「変容 Transformation」と捉えられているものの、変容をすべて人間形成と見なせるのか否かをめぐって議論が交わされている。また、経験的な素材であるライフヒストリーの質的分析は蓄積されているが、経験的な事実と規範的な方向づけの関係をめぐる理論的議論は十分に尽くされているとは言いがたい。

２．研究の目的

以上のような状況のもと、本研究では、ドイツ教育哲学における BOB において、(1)人間形成の概念がいかに規定されているのか、(2)経験と規範（ないしは当為）との関連がどのように根拠づけられているのか、という２点を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 人間形成の概念については、BOB を代表する H.=Chr. コラーの提唱する「変容としての人間形成過程の理論 Theorie transformatorischer Bildungsprozesse」を中心に検討した。
(2) 経験と規範との関連については、ドイツ教育哲学の BOB で展開されている理論的な議論を検討し、その特徴や課題を明らかにした。また、本研究においても実際に BOB を実施することを通して、経験と規範を媒介するための方法論について検討した。

４．研究成果

(1) 人間形成の概念について

BOB を代表するコラーの提唱する「変容としての人間形成過程の理論」の検討を通して、以下のことを解明、確認した。

①フンボルトの古典的人間形成論

古典的人間形成論の範型を提出した W.v. フンボルトによれば、「人間の真の目的は、その能力をひとつの全体へと最高度に、調和的に形成すること」である。また、その形成にとっては、「自己と世界との相互作用」が要件となる。すなわち、「諸力の全面的な発達」、「自我と世界との相互作用」という２点が人間形成論の要点となる。さらにフンボルトによれば、人間と世界との人間形成的な相互作用にとって、言語が決定的なメディアとなる。言語は、人間とモノとの関係においても（＝言語の世界開示的機能）、また人間と他者との関係においても（＝言語のコミュニケーション的機能）、自己と世界との相互作用を媒介する。その際、言語は、世界を模写するものというよりも世界や思考を構成するメディアであるとも考えられている。フンボルトの人間形成論によれば、人間形成とは、それまでの世界観の拡大と組み替えを意味し、そのためには別の言語ないしは言語共同体との対話的なかかわりが決定的な契機となる。

②古典的人間形成論の特徴と課題

フンボルトの人間形成論は、18 世紀に提出されたものとはいえ、言語ゲームの多様性や言語の構成的機能が指摘されているなど、今日の言語哲学からみても、きわめて現代的な側面をもっているといえる。フンボルトが示した「自己と世界との相互作用による人間形成」という構図は、現代に至るまで人間形成論の根幹をなしている。他方、古典的人間形成論には、いくつかの疑問や批判が向けられる。例えば、「人間形成過程の引き金、ないしはこれまでの世界観を問い直し新しく組み替えるきっかけとなるものは何なのか（たまたま異なる言語と出会うだけで十分なのか）」、「フンボルトにおいては、それぞれの言語ゲームの差異が強調されているものの、最終的には調和的、相互補完的関係を取り結ぶと考えられている。しかし今日の言語哲学の水準から考えると、さまざまな言語ゲームの調和的な相互補完ではなく非合意へと方向づけられたモデルが必要ではないか」、「現実の人間形成過程の経験的研究にとって人間形成論はいかなる意義をもつのか」、等々である。

③変容としての人間形成過程の理論

変容としての人間形成過程の理論は、フンボルトの人間形成論のさらなる展開として構想されている。この理論は、R.コケモーアの理論に着想を得て、人間形成概念を「世界関係と自己関係の形態の根本的な変容」と規定する。既存の世界関係・自己関係の枠組みのなかで新しい情報を受け入れ、習得し、処理することが学習過程と見なされるのに対して、既存の世界関係・自己関係の枠組みが根本的に変わることが人間形成過程である

と捉えられる。また、そのような変容を促すきっかけとして、危機の経験が挙げられている。つまり、従来の世界関係や自己関係の形態では十分に対処できない新しい問題状況に直面し、その克服に取り組むなかで、問題の認知や解釈や処理の新しい傾向が生じ、その問題状況を以前よりもよりよく解決することができるようになる場合、それが人間形成過程と呼ばれる。変容としての人間形成過程の理論では、「何が正しい／よりよい人間形成なのか」という人間形成概念に関わる規範的な問いはいったん棚上げされ、「人間形成過程はどのように進行するのか」という経験的な問題設定に限定されている。これによって、人間形成に関わる経験的な研究と結びつく可能性が開かれる。

④変容としての人間形成概念をめぐる検討

変容としての人間形成過程の理論では、上で述べたとおり、学習と人間形成が区別された上で、自己関係と世界関係の変容が人間形成であると見なされている。また、「何が正しい／よりよい人間形成なのか」という規範的な問いは棚上げされている。このような概念規定に対しては、学習と人間形成を経験的に区別することが可能なのか、「悪い方向」への変容も人間形成と捉えてよいのか（例えば、過激派のメンバーへの変容も人間形成と呼べるのか）、人間形成概念には自己や世界に対する批判性の獲得という要件が不可欠なのではないか、これまでの自己関係と世界関係の枠組みが、そのままの形でさらに増強されるような場合も人間形成と呼べるのではないか、等々の疑義や異論が出されている。これらの疑義や異論に対して、変容としての人間形成過程の理論では、少なくともさらなる変容を妨げない限りにおいて、その変容は人間形成であると捉えられている。また、人間形成の「善し悪し」は、概念規定のレベルではなく社会的な議論や実践のレベルで判断されるべきものと捉えられている。すなわち、何らかの人間形成の内実を「望ましい」ものと規定してしまうことは、それ以外のあり方を「望ましくない」ものとして排除してしまうことにつながる。多元性と複数性という現代社会の条件を踏まえるならば、人間形成の概念は「変容」という形式的規定にとどめ、その内実の善し悪しは社会的な議論や実践のレベルに委ねるべきだと考えられている。現代ドイツ教育哲学における BOB では、自己関係と世界関係の変容としての人間形成概念がひとつの共通理解をなしているが、なお議論が重ねられている状況である。

(2) 経験と規範との関連について

伝統的、規範的な人間形成論と経験的な人間形成研究との関係のあり方について、現代ドイツ教育学では、両者は異質の言語ゲームであり、経験的研究から何らかの規範を直接に導き出すことはできないという理解が一般的である。もっとも、経験的な現実を無視して規範的な議論を展開することも、規範性を考慮しないまま経験的研究を蓄積することも、ともに好ましくないという認識も広がっている。BOB における経験と規範の関係をめぐる議論の検討を通して、以下のことを解明、確認した。

①経験的現実の意味理解的再構成

BOB では、フッサールやシュッツの現象学、ディルタイの解釈学、ヴェーバーの理解社会学、ミードのシンボル的相互作用論、ガーフィンケルやサックスのエスノメソドロジー、バーガーやルックマンの社会構成主義などを背景として、機能主義的、客観主義的アプローチでは明らかにできない社会的現実の意味構成を解釈学的に解明することが課題とされている。人間形成過程は、客観的に把握できる所与の事実として存在しているのではなく、社会的、言語的に構成された構成物という性格をもつ。人間形成過程はまた、学習とは異なって、長期にわたる過程であり、短い期間で区切って同定し対象化できるものではないという特徴をもつ。BOB では、このような特徴をもつ人間形成過程を経験的に解明する方法として、ナラティヴ・インタビューをもとに人間形成過程を質的に再構成するというアプローチが採られている。

②BOB における人間形成過程の再構成の事例

ドイツ教育哲学における BOB の第一人者である W.マロツキとコラー、第二世代とも呼ぶべき Th.フックスと A.-M.ノールは、それぞれ例えば以下のように人間形成過程の再構成を試みている。マロツキは、ひとりの女性の半生についてのインタビューをもとに、その女性の人間形成過程を、「背負わされた生き方」から「否定的経験」を経て「自ら規定する生き方」へと変化する過程として描き出した。コラーは人間形成の自己形成的側面と社会的文化的側面との交差を言語ゲームに求め、言語ゲームの変容がとりわけ顕著に現れる事例として移民に注目する。そして、ひとつの研究事例として、イラン人男性とドイツ人女性の間にイランで生まれ、後にドイツに移住した 26 歳の女性へのインタビューをもとに、「〔ドイツという〕異文化への適応」から「二つの文化の使い分け」を経て「〔イラン人でもドイツ人でもない〕国際人としての自己理解」へと至る変容の過程を描き出し

ている。
　フックスは、それまでの人生段階における自明性を反省的に問い直し、新たに自律的に自己を方向づける出来事ないしは過程を人間形成と見なした上で、それが典型的に見られる時期を青年期に求める。そして 16 歳から 19 歳までの青少年 24 名にインタビューを実施し、各人のそれまでの生涯のなかにどのような形でそのトポスが含まれているのかを抽出し、その意味を検討するという試みを行っている。ノールは、偶然に始まった出来事が後に人生の方向づけの変容にまで至る自発的な過程に注目する。そして、青年（20 歳）、壮年（35 歳）、高齢者（65 歳）という異なる年齢段階の対象者へのインタビューを比較分析し、自発的な人間形成過程が６つの段階を経て進行することを示している。

③BOB における経験と規範の媒介
　BOB に対しては、個別事例から一般性をもつ理論を導き出せるのか、研究者のもつ理論を経験的なデータのなかに再確認するだけにとどまるのではないか、信憑性が疑われる自己物語をそもそも経験的現実とみなすことができるのか、反事実的な視点を展開することが理論の課題であって、必ずしも経験的な現実から理論を導き出す必要はないのではないか、といった疑義や異論が寄せられている。これに対して BOB では、主観主義と客観主義の二項対立に替えて、主観と客観の解釈学的循環のなかに適切に入り込むことが目指されている。また、相互に異質な言語ゲームである人間形成論と人間形成研究の関係づけにおいて、経験的分析の枠組みの精緻化、および変容の規範的評価という点に哲学的人間形成論の役割が認められている。BOB における人間形成論と人間形成研究の媒介は、それ自体が目的なのではなく、人間形成論と人間形成研究を相互参照的、相互補完的に関係づけていくことで、人間形成の様相を新たに描き出していく点に意義が求められる。

(3) BOB の方法論
　規範と経験の架橋を試みる BOB では、架橋のための質的研究の方法として、ナラティヴ・インタビューの分析と再構成という方法が用いられる。この方法の特徴と課題として、以下のことを解明、確認した。

①BOB では、先に述べたように、人間形成過程に関して次のような前提に立つ。第１に、人間形成過程は客観的な所与ではなく、社会的に構成された、意味をもつ現象であり、その意味付与の様相を再構成することによってのみ適切に把握できる。第２に、人間形成過程は一回的、一時的な出来事ではなく長期にわたる出来事であり、その過程を経験的に解明するには、質的研究の方法論のなかでも特に、F.シュッツェの提唱するナラティヴ・インタビューの方法が適している。ナラティヴ・インタビューでは、インタビュイーはまず、ライフヒストリーを自発的に物語るよう促され、その後インタビュアーとインタビュイーとの間で追加的、補足的な質問と回答が交わされる。この方法は、自己界関係と世界関係の変容という点で人生のどの局面が重要と見なされるべきかが前もって決定されておらず、重点をどこに置くかはインタビュイー自身が決定するという点が特徴である。
　続いて、インタビュー・データはトランスクリプトの形で書き起こされ、まず出来事の経過の構造という観点から検討される。また、インタビュー・データの分析に当たっては、内容面（何が語られたか）のみならず語りの形式上の特徴（どのように語られたか、すなわち語彙の選択、修辞、構文ないしは統語上の特徴、語りの中断や休止といった語り方の諸側面）にも注意が払われる。

②人間形成過程の経験的研究にとって、ナラティヴ・インタビューの分析という方法は、次のような課題をもつ。第１に、ナラティヴ・インタビューは過去の経験の回顧的な描写に限定されるという点。ライフヒストリーの語りへの着目は、長期にわたる人間形成過程を探究できるという長所があるが、変容の出来事それ自体を直接に観察し把握することはできず、変容の前後の相違が再構成して示されるにとどまる。
　第２に、インタビューで語られる事柄はインタビュイー個人の自己理解や世界理解に焦点化されがちで、社会的、言説的な条件を視野に収めることが難しいという点。BOB では、自己と世界との相互作用のなかで人間形成が進んで行くと捉えるが、インタビューのなかではインタビュイーの視点からみた自己理解や世界理解は多く語られるものの、インタビュイーを取り巻く社会的、経済的、文化的な背景や条件、それらとの相互作用の様子を解明して描き出すことは難しい。この点を補完するには、例えばブルデューのハビトゥス論やバトラーの主体化論のような社会理論的構想を分析の過程に組み込むことが課題となる（BOB 研究者である L.ヴィガーや H.-R.ミュラーは、それぞれ「人間形成形態 Bildungsgestalt」「人間形成の布置構造 Bildungskonstellation」という概念によって、社会的、言説的条件をも視野に収めた人間形成の再構成を試みている）。

③BOB は、研究実践における主観主義と客

観主義の二元論の克服を目指し、主観と客観の解釈学的循環に適切に入り込むことを要件とする。このことから、BOB の研究実践に関しては、以下のような課題も指摘できる。

第１に、BOB においては、インタビュアー自身の存在がインタビュイーとの間に何らかの権力性を生み出し、インタビュー場面での尋ね方（雰囲気、語彙の選択、口調や抑揚、インタビュイーの語りに対する反応など）が受け答えを方向づけてしまうことに、とりわけ敏感でなければならない（方向づけそのものを否定するということではなく、人間形成の様相はインタビュアーとインタビュイーとの相互作用を通して構成されるという点に自覚的でなければならない）。

第２に、BOB はそれ自体がひとつの社会的な実践であり、否応なく何らかのパフォーマティヴな力をもつ。BOB において再構成される人間形成の様相が、規範命題（人間形成はかくあるべきである）ではなく事実命題（これが人間形成である）から成り立つとしても、ある現実を「これが人間形成である」と名づけて示すことそれ自体が不可避的にその外部を生み出し、それにあてはまらない現実（語り）を「人間形成ではないもの」として排除することにつながるという点には、十分に配意する必要がある

第３に、BOB における人間形成概念はフンボルトやヘーゲルに由来する古典的人間形成論を下敷きとしているが、異質なものの経験による弁証法的発達という古典的人間形成論の構図自体が支配的な枠組み（ドミナント・ストーリー）としてインタビュアーやインタビュイーを拘束している可能性にも注意する必要がある。BOB は、客観的に把握できない人間形成の現実を描き出すことを課題とするが、その作業の過程で近代的な弁証法的発達の構図が無反省に前提とされてしまうならば、インタビュアーが聞きたいと思っていること以外の語りへの耳（ないしは分析の眼差し）が閉ざしてしまい、再構成される人間形成の様相はいずれもその構図に収まるよう描き出される結果となる。BOB の方法論、およびそれが描き出す人間形成の様相のパフォーマティヴな意味について、さらに検討を重ねる必要が認められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①野平慎二「非弁証法的な人間形成形態の再構成の試み－ある大学生のビオグラフィ・インタビューの人間形成論的読解」、『愛知教育大学研究報告　教育科学編』67、2018 年、pp. 9-16.（査読なし）

②野平慎二「人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究における人間形成論と人間形成研究の媒介－思想史的および物語論的観点からの検討」、『愛知教育大学研究報告教育科学編』65、2016 年、pp. 99-107.（査読なし）

〔学会発表〕（計２件）

①野平慎二「非弁証法的な人間形成形態の再構成の試み－ある大学生のビオグラフィ・インタビューの人間形成論的読解」、教育哲学会第 60 回大会、大阪大学（大阪府・吹田市）、2017 年 10 月 15 日。

②野平慎二「人間形成論と人間形成研究の媒介としてのビオグラフィ研究？　解釈学的、物語論的観点からの検討」、教育思想史学会第 25 回大会、慶應義塾大学（東京都・港区）、2015 年 9 月 13 日。

〔図書〕（計１件）

①小笠原道雄、森川直、上畑良信、野平慎二ほか『教育哲学の課題－教育の知とは何か啓蒙・革新・実践』福村出版、2015 年、407 ページ（185～202 ページ）。

６．研究組織

(1) 研究代表者

野平 慎二（NOBIRA, Shinji）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：５０２４３５３０

(2) 研究協力者

①ハンス＝クリストフ・コラー（Hans=Christoph Koller）
ハンブルク大学・教授

②ローター・ヴィガー（Lothar Wigger）
ドルトムント工科大学・教授

③ハンス＝リュディガー・ミュラー（Hans=Rüdiger Müller）
オスナブリュック大学・教授